

2016年3月 コラム 「レビー小体病は全身病」

DLBSN 東京 協力医 福井俊哉（かわさき記念病院）

私は、「レビー小体型認知症」ではなく「レビー小体病」という言葉をよく使います。その理由は、レビー小体は脳だけではなく体のいたるところに沈着していろいろな症状を出してくる「全身病」であるからです。今月のコラムでは、「レビー小体型認知症」という名称からはそもそも思いつきにくいような、それでいて頻度の高い「レビー小体病」の症状をご紹介します。特にそれらの症状が単独で初期から出現してきた場合、他の病気に誤診されることが少なくありませんので要注意です。

- **脳貧血**： 立ち上がった時・立っている時・歩いているとき・食後座っているとき、に血圧が下がりがり気分が悪くなったり意識を失う（失神）。
- **血圧の変動**：理由もなく血圧が極端に上がったたり下がったりする。
- **食欲の変動**：胃腸の動きが低下するため、前回の食事が残っていて食べられなくなったり、高度の便秘になったりする。
- **排泄の問題**：認知症がなく、泌尿器科的な異常がないにもかかわらず頻尿や尿失禁が出現する。
- **体感温度の異常**：無用に寒がる・暑がる、風邪でもないのに熱があり風邪をひいたと言う。
不用意に抗ヒスタミン薬の入った風邪薬を服用すると極端は意識障害（薬剤過敏性）を生じ可能性があるので要注意である。

- **発汗過多**：特に誘因もなくたくさん汗をかく。
- **何でもないところでよく転ぶ**：パーキンソン症候群が発症する前からバランス障害が単独で出現することもある。
- **匂いや味がわかりにくい**：自覚されないことも多く気が付かれにくい。本人の作る料理の味が変わってくることで家族が気づくことも多い。のちに述べるレム睡眠行動異常症と同様に、レビー小体型認知症が発症する何年も前から認められることがある。
- **レム睡眠行動異常症**：夢は夜中～朝方の多い「レム睡眠期」に出現する。正常ではその間は体の筋肉が弛緩状態（緩んでいる）なので動くことはできないが、レビー小体病・パーキンソン病の場合はこの弛緩状態が生じないことがある。この場合、夢の中での行動がそのまま体の動きとなり、大声を出す・手足をばたつかせる・立ち上がりあらぬ方向に歩く、などの「レム睡眠行動異常症」が出現する。レビー小体型認知症が発症する10年以上も前から認められることもある。

このように、「レビー小体病」は認知症やパーキンソン症候群だけではなく、様々な全身症状を呈する疾患です。介護されるご家族やスタッフがとくに自律神経障害やレム睡眠行動異常症についてよく「識って理解」（真鍋先生；2015年11月コラム参照）しておけば、過度の心配、不要な騒動や救急車依頼を避けられると思われます。

※ 次回のコラム担当は真鍋雄太先生です ※